

## 優秀作品賞

### 「ひかり、ママは一生懸命生きたんだよ」

梶原 美幸さん

友人は36歳の若さでこの世を去った。結婚10年目にしてやっと念願の子供を授かった矢先だった。どんなにつらかっただろう、どんなに苦しかっただろう、どんなに切なかっただろう。「悔しくて、悔しくて。泣いても、泣いても、泣ききれない。」そう言った友人の言葉が今でも耳から離れない。

友人は学生時代からボランティア活動に熱心だった。困っている人がいれば黙って見ていられず、常に救いの手を差し伸べた。自分よりまずは他人を思いやるとても優しい人間だった。ほんの半年前までは、仕事に、子育てに、ボランティアに、忙しくも充実した毎日を送っていた。「最近、なんか重苦しいんだよね。」みぞおちを押えながら友人は言った。そう言われてみると、久しぶりに会った友人は心なしか痩せたように見えた。「健診受けてるんでしょ?」「結婚してから自営業になったでしょ。なかなか休めないし、それに今は子供に手がかかるから。大丈夫、大丈夫。今まで入院したこともないし、大きな病気もしたことがないんだよ。食中毒にだってかかったことないんだから。」そう言って友人はこっそりとしたパスタを美味しそうに頬張った。「確かにね。忙しさからくるストレスなんじゃない。」「そうかも。」私と友人は2人して笑い合った。

その半年後、友人は突然血を吐いて倒れた。末期の胃がんだった。病室のドアを開けると、友人は窓の外を眺めながらベッドに横たわっていた。振り返った友人の姿を見て思わず絶句した。眼や頬は落ち窪み、病室の無機質な白さに同化してしまうかと思うほど、肌は透けるように白かった。握った手から伝わってくるぬくもりに、かろうじて友人が生きている証を感じとることができてほっとした。「あと2ヶ月だって…。」しぼりだすように友人は言った。「私なにか悪いことした?誰かに迷惑かけた?どうして私なの?あの子、昨日はじめて、ママって言ったの。」そう言って泣き崩れる友人に

かける言葉もなかった。ただただ、そばにいて、一緒に泣くことしかできなかった。

毎年、健診を受けていれば、もっと早く受診していれば、あの時もっともっと強く受診をすすめていれば、友人を救えたかもしれない。そんな悔やんでも悔やみきれない思いだけが胸に残る。その後も、やせ細った肩を何度も何度も上下させて、友人は泣き続けた。

結局、友人は2ヶ月を待たず亡くなった。友人の葬式には驚くほど大勢の友人や知人が集まった。友人の忘れ形見である「ひかり」と名づけられた子は、葬式の間、友人の遺影の前にちょこんと座り、しきりに「ママ、ママ」と話しかけていた。その光景は今でも鮮明に脳裏に焼き、私の胸を締め付ける。まっすぐに、ただまっすぐに、生きてきた友人を突然襲った病魔。そして、世界に二人としない大切な友人を失った空虚感。

あれから5年。「ひかり」は今年小学校に入学する。自分の母親の命を奪ったがんをやっつけるために医者になる夢を胸に抱いて。